
コラム 行政による環境整備や保全の支援

出典：〇〇

【視点⑤】生息・生育地のつながりの状況

江東区には、樹林や草地、干潟のほかにも、様々な自然環境があります（表 2-10）。また、たとえば「樹林」といっても、人との関わり方によっていくつかのタイプに分けることができます（表 2-11）。

このように、「生きものの視点」と「人の利用の視点」が組み合わさって、いろいろな環境がつけられていることが、江東区の特徴のひとつです。

これらの環境を、似ているもの同士でグループ分けすると、表 2-12 のように、5 つの「生態系タイプ（生きもののすみかの種類）」に分類することができます。

表 2-10 江東区における生きものの生育・生息環境の区分

環境の区分	概要
①緑地	主に高木～低木などの木本植物がまとまって生育している陸域環境
②草地	主に一年生～多年生の草本植物がまとまって生育している陸域環境
③自然裸地	砂浜や砂礫などで構成され、植生がない、あるいは疎らな陸域環境
④湿地・池	湿地や池などの陸上に造成された水域環境
⑤河川・運河	江東内部河川や荒川、隅田川などの水域環境
⑥干潟・ヨシ原	主に砂泥質の浅場や抽水植物で構成され、隣接する海域等を含む水辺環境
⑦磯・護岸	主に礫やブロックで構成され、隣接する海域等を含む水辺環境
⑧人工裸地	コンテナヤードや道路空間など、ある程度のまとまりをもった人工的に造成された植生のない陸域環境
⑨工作物	建築物や土木構造物などの人工的に作られた構造物全般の環境

表 2-11 江東区における人の利用空間の区分

利用空間の区分	概要
A 都立公園	東京都が管理・運営する公園。総合公園のほか庭園、緑地・緑道も含む。水辺空間を兼ね備えた公園もある。
B 区立公園	江東区が管理・運営する都市公園。場所によっては、水辺空間やポケットエコスペースを兼ね備えた公園もある。
C 区民農園	江東区が整備・管理し、市民向けに貸し出している農園である。
D 公共施設空間	区役所や図書館、鉄塔など、公的機関が所有・管理している施設やその周辺の空間であり、屋上・壁面緑化の空間も含む。えこつくる江東ではポケットエコスペースも整備されている。
E 小学校・幼稚園敷地空間	江東区が管理する小学校や幼稚園の校舎や運動場などの敷地の空間であり、ポケットエコスペースを兼ねた箇所もある。
F 河川空間	国が管理する一級河川、東京都が管理する二級河川、江東区が管理する普通河川等において、水面や水際のエコトーン、河川敷を含む河川空間である。
G 湾岸空間	東京湾に面した埋立地の海岸線、海に面した沿岸部である。
H 社寺林	神社や寺院が所有する森林のことで、古くから保護され、改変の履歴が少ない空間であり、歴史・文化的にも価値のある空間である。
I コミュニティガーデン	行政主導ではなく区民が自主的に集まり、管理・運営する「地域の庭」であり、花や野菜、果物などの植物を栽培する空間である。
J 企業敷地空間	事業者が所有または使用する敷地であり、工場や建物などの建築物、屋上・壁面緑化、敷地内の緑地やビオトープなどの空間も含む。
K 高校・大学・専門学校敷地空間	高校や大学、専門学校が所有または使用する敷地であり、校舎などの建築物、屋上・壁面緑化、敷地内の緑地やビオトープなどの空間も含む。
L 集合住宅敷地空間	団地やマンションなどの建築物、バルコニーなどの緑化、敷地内の緑地空間を含む。
M 個人住宅敷地空間	戸建て住宅の建築物、バルコニーなどの緑化、敷地内の庭などの緑地空間を含む。

表 2-12 江東区における生物多様性の環境要素のマトリクス表、及び生態系タイプ

			生きものの生育・生息環境の区分								
			① 緑地	② 草地	③ 自然裸地	④ 湿地・池	⑤ 河川・運河	⑥ 干潟・ヨシ原	⑦ 磯・護岸	⑧ 人工裸地	⑨ 工作物
人の利用・関わりに関する区分	公共	A 都立公園	●	●		●					
		B 区立公園	●	●		●					
		C 区民農園	●	●							
		D 公共施設敷地空間	●	●						●	●
		E 小学校・幼稚園敷地空間	●	●		●				●	●
		F 河川空間		●	●		●	●			
		G 湾岸空間						●	●	●	
	民間	H 社寺林	●	●							
		I コミュニティーガーデン	●	●							
		J 企業敷地空間	●	●		●				●	●
		K 高校・大学・専門学校敷地空間	●	●		●				●	●
		L 集合住宅敷地空間	●	●		●				●	●
		M 個人住宅敷地空間	●	●		●					●

ア 都市緑地生態系タイプ

公園や街路樹など、植樹由来の都市緑地の生態系タイプ。都立公園などの大規模なものから街路樹等の小型のものもあります。緑地の少ないエリアではネットワークのつながりも求められます。

イ 草地・自然裸地生態系タイプ

公園などに植えられた芝生環境等を含む草地・自然裸地の生態系タイプ。自然由来の草地や自然裸地は非常に少ないため、特に保全や創出が求められます。

ウ 水辺生態系タイプ

江東区の大きな特徴の一つである水辺を対象とした生態系タイプ。江東区には、湿地や江東内部河川などの多様な水辺があり、これらを維持するとともに、干潟やヨシ原は非常に少ないため、特に保全や創出が求められます。

エ 都市・住宅地型生態系タイプ

建築物を利用するチョウゲンボウやカラス、ウミネコなどの都市適応型の野鳥などが見られるような都市型の生態系タイプ。外来種管理などの付き合い方も求められます。

オ 人工的・教育利用型生態系タイプ

①～③のうち、特に環境教育にも使われるようなポケットエコスペースやビオトープなどの人工的な管理によって作られる生態系タイプ。更なる整備などが求められます。

江東区では、グループ分けした 5 つの生態系タイプ（生きもののすみかの種類）が、区内のどこに分布していて、それぞれがどのようにつながっているかを調べるために、「エコロジカルネットワーク」の分析を行いました。

生きものは、すみかの間を移動することで、食べ物を見つけたり、子どもを育てる場所を探したりします。そのため、つながりが強い場所（つまり、エコロジカルネットワークの中で大切な場所）には、生きものが集まりやすくなります。こうした場所を守ることが、生物多様性を効果的に保つことにつながります。

なお、分析には次のような指標（調べるための基準）を使っています。

ア 都市緑地生態系タイプ	：樹林地に着目
イ 草地・自然裸地生態系タイプ	：草地に着目
ウ 水辺生態系タイプ	：河川に着目
エ 都市・住宅地型生態系タイプ	：工作物の分布に着目
オ 人工的・教育利用型生態系タイプ	：ポケットエコスペースに着目

※分析は、樹林や草地などの「場所の良さ」及び「場所と場所のつながり」の両方を考慮したうえでネットワークの質を定量的に評価できる dIIC(delta Integral Index of Connectivity) という指標を採用しました。

		
ア 都市緑地生態系タイプ (亀戸中央公園) (写真精査中)	イ 草地・自然裸地生態系タイプ (水の広場公園) (写真精査中)	ウ 水辺生態系タイプ (仙台堀川公園) (写真精査中)
		
エ 都市・住宅地型生態系タイプ (区役所前) (写真精査中)	オ 人工的・教育利用型生態系タイプ (砂村 PES) (写真精査中)	

図 2-9 各タイプの代表的な環境写真

ア 都市緑地生態系タイプ

都市緑地生態系タイプのつながりの現状

都市緑地では、そのつながりがあることで多くの生きものが棲んでいます。例えば、鳥たちは緑地の間を移動することで食べ物を探したり子育ての場所を見つけることができます。江東区でも実際にコゲラやシジュウカラといった小型の鳥が見られ、彼らは都市緑地の間を移動しながら巣作りや食べ物を探して暮らしています。

右の図は、小型の鳥から見た「樹林のつながり（ネットワーク）」を表しています。この図では、樹林の広さや距離などをもとに、それぞれの樹林がどれくらい大切かを評価しています。

樹林同士が線でつながっているところは、小型の鳥がその間を移動できることを示していて、また青い丸の大きさは、その樹林の重要度が高いことを表しています。これを見ると、現状でつながりがあるところやないところがわかり、たとえば「夢の島緑道公園」は、単に緑があるというだけでなく、つながりという点からも特に大切な場所であることがわかります。

都市緑地生態系タイプのつながりの課題

今つながっている樹林は、たとえ小さなものであっても、生きものが移動するときの通り道や休む場所として、とても大切です。そのため、こうした樹林を守っていくことが必要です。

また、図で線が繋がっていない場所では、これから新しく樹林をつくることで、生きものが移動しやすくなり、自然のつながり（ネットワーク）を広げたり強くしたりすることができます。

そのためには、効率よく樹林を配置しながら、新しい樹林地をつくっていく取組が大切です。

	
海の森公園（写真準備中）	辰巳の森 緑道公園
	
シジュウカラ	メジロ

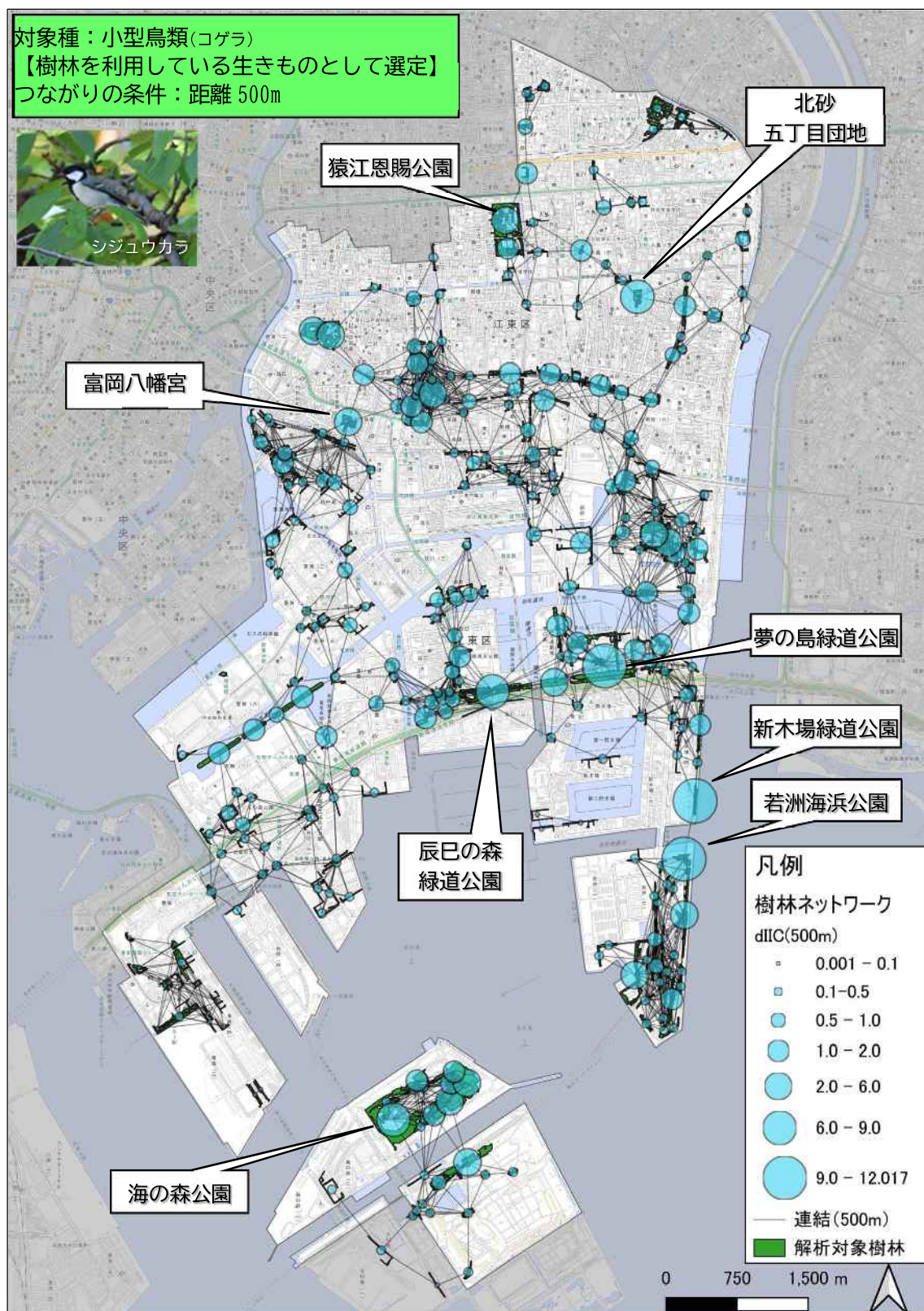


図 2-10 樹林地のネットワーク解析結果

イ 草地・自然裸地生態系タイプ

草地・自然裸地生態系タイプのつながりの現状

草地や自然裸地では、そのつながりがあることで様々な昆虫などが棲んでいます。実際に、ショウリョウバッタやエンマコオロギといったバッタの仲間の多くの種類が広い草地で暮らしています。

右の図は、バッタの仲間から見た「草地のつながり（ネットワーク）」を表しています。この図では、草地の広さや距離などをもとに、それぞれの草地がどれくらい大切なかを評価しています。

緑色が濃いほど、その草地の重要度が高いことを示しています。これを見ると、現状でつながりがあるところやないところがあり、たとえば「荒川河川敷」は、単に草地や自然裸地があるというだけでなく、つながりという点からも特に大切な場所であることがわかります。

草地・自然裸地生態系タイプのつながりの課題

今つながっている草地は、生きものが移動するときの通り道や休む場所として、とても大切です。そのため、たとえ小さな草地であっても、開発などでなくしてしまわないように、これからも守っていくことが必要です。

一方で、図で線が繋がっていない空白のエリアでは、近くの草地から生きものが移動できるような場所に、新しく草地をつくることで、自然のつながり（ネットワーク）を広げたり強くしたりすることができます。

このような取組を、草地の配置を工夫しながら進めていくことが大切です。

	
荒川河川敷	若洲海浜公園（写真準備中）
	
ショウリョウバッタ	エンマコオロギ

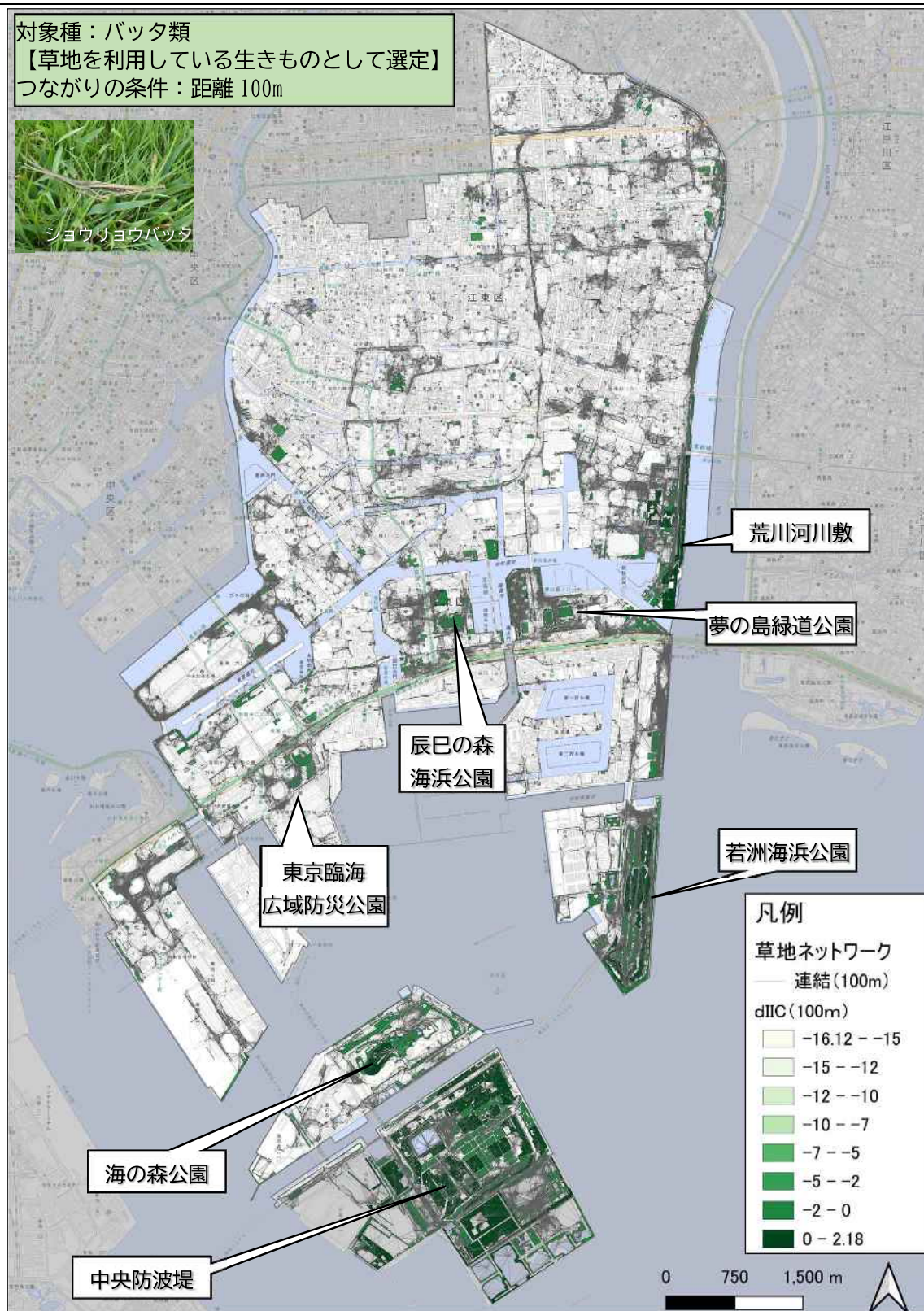


図 2-11 草地のネットワーク解析結果

ウ 水辺生態系タイプ

水辺生態系タイプのつながりの現状

堰などで分断されずにつながっている水辺は、そのつながりがあることで水の中に棲む多くの生きもの（魚や水生昆虫など）の棲みかとなっています。実際にハゼの仲間やエビの仲間など多くの生きものが見られます。

右の図は、水の中に棲む生きものから見た「川につながり（ネットワーク）」を表しています。この図では、川の区間（川が分かれたり合流したりする間の部分）の長さや、つながりをもとに、それぞれの区間がどれくらい大切かを評価しています。

青色が濃いほど、その川の区間が水生生物にとって重要であることを示していて、たとえば「荒川」や「隅田川の河口部」は、つながりという点からも特に大切な場所であることがわかります。

なお、水辺のつながりだけでなく、水辺と陸のつながりも大切です。水辺と陸のつながり部分のエコトーン（だんだんと環境が移り変わる場所）を代表する干潟については江東区内では「新砂干潟」だけが残っていて、それ以外の水辺はほとんどがコンクリートなどで囲まれた「直立護岸」になっています。そのため、水の中と陸がつながりにくくなっていて、生きものにとって棲みにくい環境になっています。

水辺生態系タイプのつながりの課題

つながりが強い（色が濃い）河川は、水の中に棲む生きものが移動するときの大切な通り道になっています。そのため、これらの川のつながりをこれ以上分断しないように、しっかり守っていくことが必要です。

また、陸のほうでは、池や湿地と緑地が一体となって整備されている場所はまだ少ないのが現状です。そこで、水辺と陸地がなだらかにつながるエコトーンを新しくつくっていくことも大切です。

こうした取組によって、水生生物と陸の生きものの両方が安心して暮らせる環境を広げていくことができます。

	
仙台堀川	新砂干潟
	
シモフリシマハゼ	チゴガニ



図 2-12 河川のネットワーク解析結果

エ 都市・住宅地型生態系タイプ

都市・住宅地型生態系タイプのつながりの現状

江東区では都市化が進んでいて、建物などの人工物が区内の多くの場所を占めています。そのため、カラスやウミネコのような、都市の環境に適応できる野鳥が棲みついている例が見られます。

右の図は、現在の土地の使われ方をもとに、建物などの人工物（工作物）がどこにあるかを整理したものです。この図ではカラスやウミネコなどが休んだり巣づくりをする可能性がある場所がたくさんあることがわかります。また、ハヤブサの仲間であるチョウゲンボウは昔、地下鉄東西線の鉄橋で巣づくりしていた記録もあり、高層ビルの排気口などの隙間で巣づくりをする可能性もあります。そういう可能性のある場所がたくさんあることも示しています。

このように私たちの身近な場所にも様々な生きものが暮らしており、生きものを身近に感じられる環境がつくられています。

都市・住宅地型生態系タイプのつながりの課題

私たちが普段生活している中にも様々な生きものが暮らしていますが、そのことを忘れがちです。まずは身近なところから生きものを知ること、生きものの存在や大切さに気づき、見守っていくことが大切です。

また、チョウゲンボウやハヤブサのような生態系の上位にいるような希少な鳥が巣づくりをしている場合は、特に子育ての時期（繁殖期）に、むやみに近づいたり、大きな音を立てたりしてストレスを与えないようにすることも大切です。カラスやウミネコのような、都市にすみつく鳥たちについては、私たちの生活に悪い影響が出ないように、うまく付き合っていく方法を考えていく必要があります。

(写真準備中)	
(場所精査中)	
	
ハシブトガラス	ハヤブサ



図 2-13 土地利用現況図における工作物の分布状況

オ 人工的・教育利用型生態系タイプ

人工的・教育利用型生態系タイプのつながりの現状

ポケットエコスペースなどの淡水の池は、トンボの幼虫であるヤゴなどの棲みかにもなっています。実際にコシアキトンボやシオカラトンボなどの様々なトンボの仲間が確認されています。このようにポケットエコスペースなどの淡水の池はトンボなどの生活を支えるうえでも重要です。

右の図は、トンボの仲間から見た「ポケットエコスペースなどの淡水の池のつながり（ネットワーク）」を表しています。この図では、淡水の池同士の距離をもとに、どの場所がどれくらい大切かを評価しています。

淡水の池同士が線でつながっているところは、トンボがその間を移動できることを示していて、また青い丸の大きさは、その池の重要度が高いことを表しています。これを見ると、現状でつながりがあるところやないところがわかります。たとえば砂町小学校、仙台堀川、枝川小学校、福富川などは、トンボたちがすみかを見つけやすくなるなど、つながりという点からも特に大切な場所であることがわかります。

人工的・教育利用型生態系タイプのつながりの課題

今つながっているポケットエコスペースは、たとえ小さな場所であっても、トンボの仲間が移動するときの通り道や休む場所として、とても大切です。そのため、これらの場所を開発などでなくしてしまわないように、これからも守っていくこと、そして維持管理をしていくことが必要です。

(写真準備中)	
小学校ビオトープ（香取小）	荒川・砂町水辺 ポケットエコスペース
	
ウスバキトンボ	アキアカネ

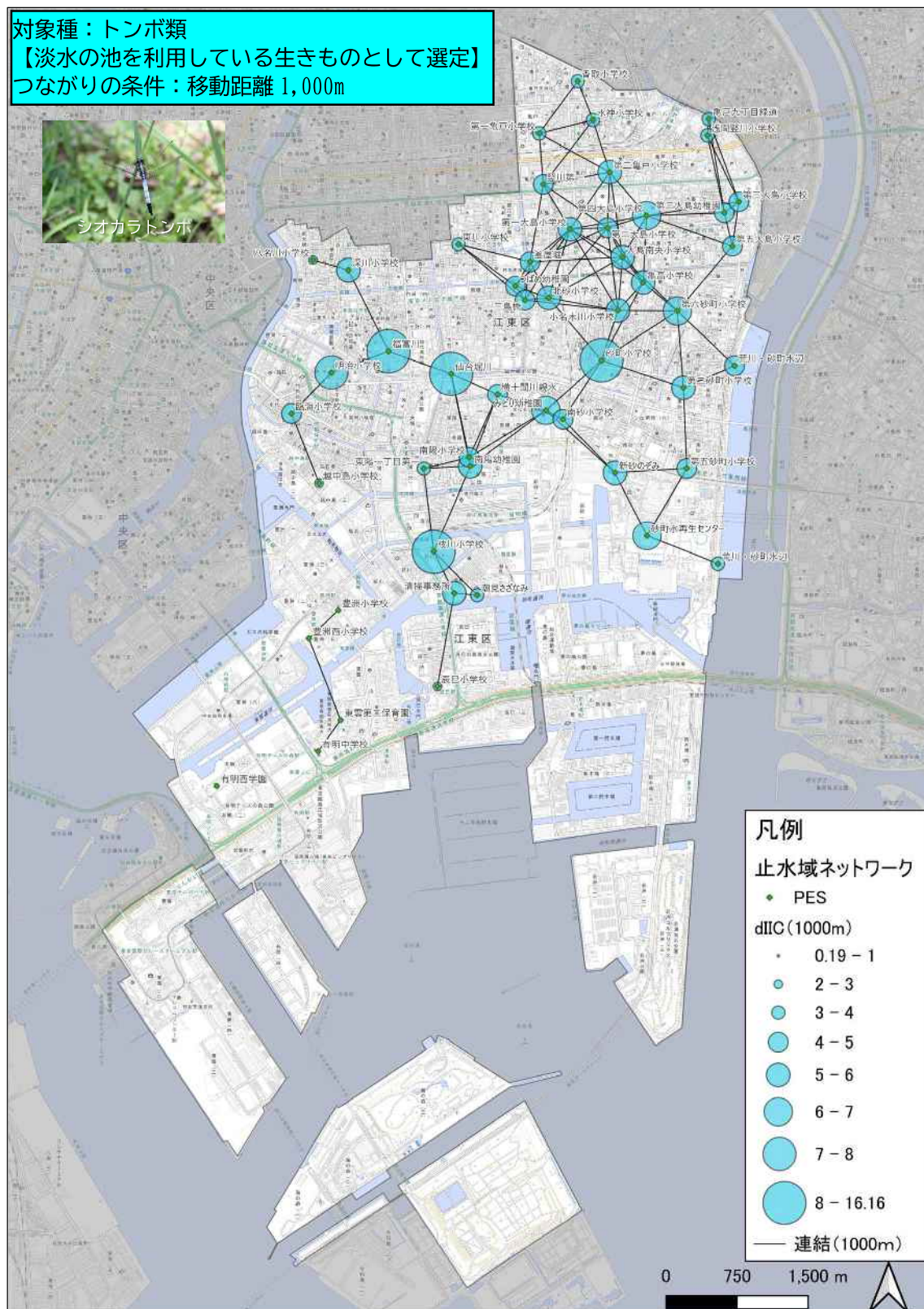


図 2-14 ポケットエコスペース（湿地）のネットワーク解析結果

コラム 公園の新設、改修における生物多様性に向けた取組状況（海の森公園）

コラム 公園の新設、改修における生物多様性に向けた取組状況（若洲公園）

第1章

第2章

第3章

第4章

第5章

参考資料

江東区では、ポケットエコスペースなどの自然を感じられる場所が整備され、地域の人たちによ
こうした場所の存在があまり知られていないこと、さらに管理に使える予算が減ってきていること

保全の取組全般の現状

江東区では、市民団体や企業、学校など、様々な人たちが協力して、自然環境を守る活動や生きものの調査などに取り組んでいます。

しかし、生きものに関する調査は、それぞれの団体が個別に行っているため、情報がひとつにまとめられていないのが現状です。また、「ここに行けば生きものの情報がわかる」といった、情報を集めて発信する拠点もまだ整備されていません。

分類	団体名	主な取組内容
市民団体・NPO	江東エコリーダーの会	各主体と連携した新砂干潟における清掃活動、生物調査
	こうとうビオトープネットワーク	各主体と連携したポケットエコスペース等における維持管理、生物調査
	NPO 法人ネイチャーリーダー江東	各主体と連携したポケットエコスペース等における維持管理、生物調査
	KOKOPELLI+ (ココペリプラス)	各主体と連携した越中島ビオトープや旧中川で造成したビオトープでの生物調査
事業者・協議会	清水建設株式会社	整備した再生の社ビオトープにて、15年以上にわたり維持管理や生物調査
	アメニス東部地区グループ	都立猿江恩賜公園を含む7つの都立公園の指定管理者として維持管理や生物調査
	株式会社竹中工務店	誘致目標に応じて整備した環境にて、グリーンインフラの実践、生物調査
	株式会社フジクラ	整備した木場千年の森にて、江戸深川の原風景の再現や維持管理、生物調査
	東陽・新砂地区運河ルネサンス協議会	汐浜運河沿いをフィールドにグリーンインフラの実践や生物調査
教育機関	武蔵野大学工学部サステナビリティ学科	造園会社と連携しながら造成した学内ビオトープにて、維持管理や生物調査
	東京環境工科専門学校	区内ビオトープにて外来種管理や生物調査
	東京都立科学技術高校	猿江恩賜公園と連携しながら生物調査、かいぼり支援、ヒキガエルや鳥類の研究



図 2-15 行政や民間団体等の活動場所（公園）

によって管理されてきました。しかし、少子高齢化によって管理する人が少なくなっていることや、などから、十分な管理がむずかしくなっています。



表 2-14 行政の環境調査の取組例

取組	行政	内容	備考
環境調査	江東区	緑被率調査	区内の緑被率の調査
		水鳥生息調査	区内の水辺における毎年の調査
		水質・底質調査	河川水質・底質（ヘドロ）等の総合的調査
	東京都	河川水辺の国勢調査（内部河川）	建設局による5～10年サイクルの調査
		水生生物調査（東京都内湾）	環境局による底生生物・付着動物の毎年の調査
		東京いきもの調査団	市民科学の力を活かしたデジタル版野生生物目録の作成
		都立公園における調査	都立海の森公園など公園管理者による調査
	国	河川水辺の国勢調査（荒川）	国土交通省による5～10年サイクルの調査
		モニタリングサイト1000（シギ・チドリ類）	環境省による中央防波堤における毎年の調査

保全の取組全般の課題

江東区では、様々な取組や維持管理が行われていますが、それを支える人手が足りなくなっており、大きな課題となっています。

また、管理に関わる人たちの間で、目標ややり方、活動への意欲、参加のしやすさ、技術や知識の量などに違いがあるため、管理の質を安定して保つことも課題となっています。

さらに、生きものに関する情報は、今のところバラバラに管理されているため、ひとつにまとめて整理することが必要です。そのためには、江東区内の関係者だけでなく、周辺の自治体とも協力していくことが大切です。そして、そうした情報を集めて発信するための拠点（情報センターのような場所）を整備することも求められています。

園、ポケットエコスペース、企業緑地等）

【視点②】事業者の取組の状況

事業者の取組の現状

東京都では、大企業が生物多様性の保全に積極的に取り組んでいますが、実際には企業の約 98.8%が中小企業です。そのため、中小企業が事業活動を通じて自然環境に配慮することがとても重要です。

しかし、中小企業が「ネイチャーポジティブ（自然に良い影響を与える）」な取組に参加するには、いくつかの課題があります。たとえば、「小さな会社ではできること」に限りがある」といった声があり、資金や人手が足りないことや、周囲の理解が得られにくいことなどが障壁となっています。

江東区では、令和 3 年の経済センサスによると、従業員が多い地域として、豊洲、亀戸、東陽、新砂、有明が挙げられます。これらの地域には、区全体の約半数にあたる 18 万人以上の従業員が働いており、小規模な事業所も多く存在しています。

また、地域によって土地の使われ方や企業の業種が異なります。たとえば、深川地区や城東地区では商業施設が多く、湾岸地区では工場などの工業施設が多いです。南部地区では、工業用地から住宅や商業、公共施設への転換が進んでいます。

このように、地域ごとの産業の特徴や企業の規模をふまえて、生物多様性に配慮した取組を進めることが大切です。

- ・費用もかけられず、SDGs に関する人材教育も難しい
- ・取り組みたいがどこから、どのように始めれば良いか分からない
- ・取り組むための人員が不足している
- ・SDGs や取組方法に関する情報が少ない

図 2-16 中小企業などの一般企業がネイチャーポジティブの取組に参画する障壁例

※一般企業がネイチャーポジティブに取り組むための実務的検討（太田、2024 年）



図 2-17 江東区における町丁別従業員数（左図）及び事業所数（右図）

令和 3 年経済センサス-活動調査より作図

事業者の取組の課題

中小企業を含むすべての会社が、自然を大切にしながら事業を進めていくためには、環境に配慮した活動を応援したり、他の会社の良い取組を紹介したりすることが大切です。また、環境にやさしい活動の効果やメリットを、わかりやすく多くの人に伝えていくことも重要です。

コラム 江東区内の企業の取組

【視点③】普及啓発活動の状況

普及啓発活動の現状

江東区では、区と市民団体が連携し、ポケットエコスペースでの活動や田んぼの学校を通じた環境学習を推進しています（表 2-15）。

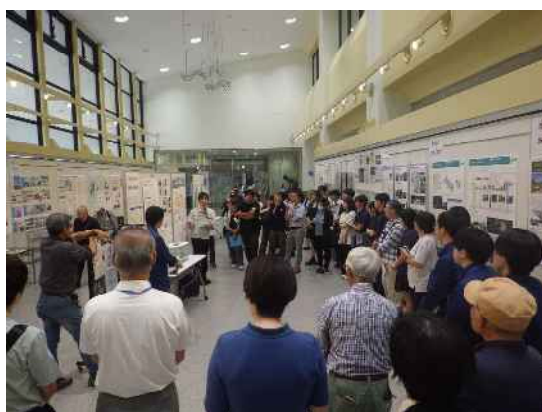


写真 2-9 生物多様性フェア 2025



写真 2-10 田んぼの学校 田植えの様子

表 2-15 江東区における行政や民間団体等の生物多様性保全の普及啓発に関わる取組例

団体名	主な取組団体や内容
江東区・(市民団体・NPO 協働)	・ポケットエコスペース活動、コミュニティガーデン活動、田んぼの学校活動を通じた緑地の維持管理や参加者相互の交流支援 ・環境教育や人材育成のための「小学生環境学習会」や「環境学習講座」、「エコリーダー養成講座」、「ネイチャーリーダー講座」「江東区環境検定」等の開催 ・環境学習施設「えこっくる江東」の運営、「江東区環境フェア」や「ネイチャー・フェスタ！Koto」の開催、生物多様性チーム江東が主催する「生物多様性フェア」の後援 ・東大島文化センター「江東区ミニ水族館」や「むしむしハウス」等の展示会を開催
江東区	・「江東区生物多様性に配慮した緑化ガイド」に基づく緑化指導
東京都	・「東京都レッドデータブック」や「東京都レッドリスト」の公表 ・「在来種選定ガイドライン」や「生物多様性に配慮したみどりの質の向上の手引き」、「エコロジカル・ネットワークマップ」等の公表
都立公園	・木場公園（都市緑化植物園）や猿江恩賜公園などにおける各種団体と連携した環境学習
市民団体・NPO	・江東エコリーダーの会、こうとうビオトープネットワーク、NPO 法人ネイチャーリーダー江東、NPO 法人マザーツリー自然学校、NPO 法人みどり環境ネットワーク！、NPO 法人 NPO Birth、KOKOPELLI+、木場プレーパークぼうけん隊など、各活動拠点における環境学習や、各主体との連携
事業者	・清水建設株式会社、株式会社フジクラなど、自社敷地内の緑地を活用した環境学習
教育機関	・武蔵野大学、東京環境工科専門学校、東京都立科学技術高校、各小中学校、高校など、ゼミや研究、授業、課外活動を通じた環境学習

江東区では、18歳以上の区民を対象に行ったアンケート調査で、「生物多様性」という言葉の意味を知っていた人は約4割でした。

このことから、「生物多様性」という言葉の意味をもっと多くの人に知ってもらうことが、自然を守る取組を広げていくために大切です。

そのためには、生物多様性についてのわかりやすい説明や、身近な生きものとふれあえる体験活動などを通じて、関心を持ってもらえるようにすることが必要です。

■問4 みどりの中の都市「CITY IN THE GREEN」の実現：施策1（詳細はP36）	
指標名：	生物多様性の内容を知っている区民の割合
算出方法：	「1. 言葉の意味を知っていた」の割合を算出
指標値：	39.8%

図表Ⅲ-4 みどりの中の都市「CITY IN THE GREEN」の実現：施策1 集計結果

n=1,240	言葉の意味を知っていた	言葉の意味は知らないが、言葉は聞いたことがあった	知らなかった
回答数	493	372	375
割合	39.8%	30.0%	30.2%

無回答：6

図 2-18 江東区長期計画区民アンケート調査結果 問：水辺と緑に関する活動状況



写真 2-11 子どもの自然体験
(NPO 法人マザーツリー自然学校)



図 2-19 川と緑の生きものの展
(東大島文化センター)

3)第3の危機(人間により持ち込まれたものによる影響に類するもの)

江東区では、様々な理由から外来生物が侵入しやすい環境にあり、実際に多くの外来生物が確認んでいた生きもの（在来生物）に悪い影響を与える心配もあります。

【視点①】外来生物の状況

外来生物の現状

江東区は、荒川や隅田川の下流にあるため、川の上流から生きものが流れてきたり、他の地域から船がたくさん行き来したりしています。そのため、外来生物が入りやすい環境になっています。

実際に、区内では中国原産のチュウゴクアミガサハゴロモが増えるなど、多くの外来生物が見つかっていて、その中には「特定外来生物」と呼ばれる、自然のバランスを大きくくずしてしまうような生きものもいます。これらの生きものが入ってくることで、もともとその地域に住んでいた生きものに悪い影響が出ることが心配されています。



写真 2-12 ナガエツルノゲイトウの生育状況

表 2-17 特定外来生物の状況

項目	特定外来生物
植物	ナガエツルノゲイトウ、オオフサモ、アレチウリ、オオキンケイギク
哺乳類	アライグマ
爬虫類	ミシシippアカミミガメ
両生類	ウシガエル
陸上昆虫類	ヒアリ、アカボシゴマダラ、クビアカツヤカミリ
クモ類	セアカゴケグモ
魚類	ブルーギル、カダヤシ
底生生物	アメリカザリガニ、カワヒバリガイ



図 2-20 外来種

されています。最近では、これらの外来生物が広い地域に広がり始めていて、もともとその場所に住



表 2-17 主に行政による外来種の対策例

項目	団体名	対策内容
外来種の対策	江東区・東京都・国	アライグマ・ハクビシンの対策(区・都)
		小型の箱わなを使用した捕獲を実施(ハクビシン・アライグマ対策事業)
		かいぼりによる外来種の防除(都)
		木場公園や猿江恩賜公園におけるかいぼり時に合わせて防除を実施
	江東区・東京都・国	ナガエツルノゲイトウの防除(区・国)
		国土交通省等による荒川での防除を実施
	江東区・東京都・国	特定外来生物等の注意喚起(区・都・国)
		ヒアリやクビアカツヤカミキリ、セアカゴケグモ、ミシシippアカミミガメ、アメリカザリガニ等の生態情報の発信や注意喚起、目撃情報マップの公表
	江東区・東京都・国	特定外来生物の防除の手引き・マニュアルの公表(都・国)
		アライグマやハクビシン、ミシシippアカミミガメ、ナガエツルノゲイトウ等の具体的な対策の手引き・マニュアルの公表
	市民団体・NPO	アメリカザリガニの防除
	市民団体・NPO	NPO 法人ネイチャーリーダー江東によるポケットエコスペースでの防除を実施

外来生物の課題

江東区では、区や東京都、国、そして市民団体やNPOなどが、様々な対策を行っています。特に、荒川を通じて広がっている「ナガエツルノゲイトウ」については、国土交通省と協力して駆除の活動が行われていますが、毎年のように見つかったのが現状です。

このような外来生物がこれ以上増えたり広がったりしないようにすること、そしてできるだけ数を減らしていくことが大切です。

【視点②】 ペットや園芸種の逸出の状況

ペットや園芸種の逸出の現状

江東区は人口が多く、他の地域との人の行き来も多いため、ペットとして持ち込まれた生きものが、残念ながら外に放されてしまうことがあります。

区では、犬や猫など、人にとって身近な生きものについて、最後まで責任を持って飼うための考え方や注意点を広く伝えています。また、飼えなくなった場合の相談窓口や、新しい飼い主を探すための情報も紹介しています。

さらに、飼い主のいない猫が増えて地域で問題になることを防ぐために、そうした猫に対して去勢・不妊手術を行うための費用を助ける制度もあります。



図 2-21 江東区 飼い主のいない猫の去勢・不妊手術費助成事業のポスター

ペットや園芸種の逸出の課題

外から来た生きもの（外来生物）だけでなく、ペットや園芸用の植物などが外に出してしまうことで、もともとその地域にいた生きものと交ざってしまい、自然のバランスがくずれるおそれがあります。

そのため、自然を守るためには、ペットや園芸植物などが外に広がらないように、しっかりと管理することが大切です。

4) 第4の危機(地球環境の変化による影響に類するもの)

地球温暖化に伴う気候変動により、異常気象や大規模な自然災害が発生するなど、地球は今深刻な危機に直面しています。江東区では、気温上昇による生きものの生息環境への影響のほか、気候変動の影響を受けやすい河口・沿岸部での影響も心配されます。

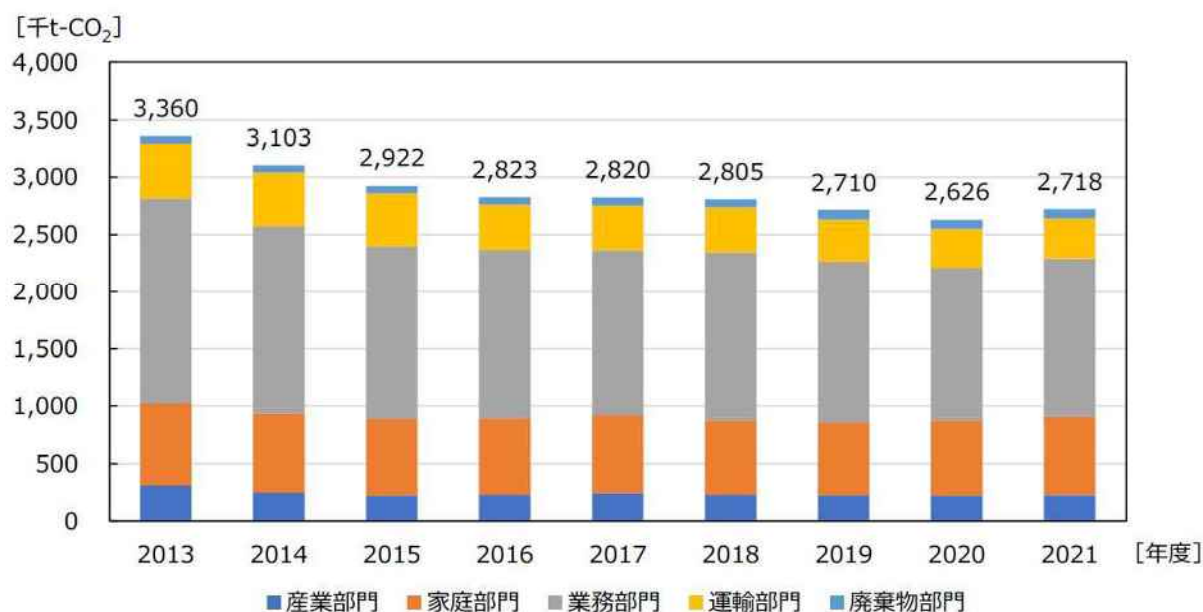
【視点①】地球温暖化対策の取組状況

地球温暖化の現状

江東区域のCO₂排出量は、コロナ禍からの経済活動の回復やCO₂排出係数の増大等により、2021年度に前年度より微増しましたが、削減率は基準年度（2013年度）比19.1%となっています。

太陽光発電や高効率給湯器等の省エネルギー設備、次世代自動車等への助成件数は着実に件数が伸びており、家庭・事業所におけるCO₂排出量の削減が進んでいます。

区有施設での再エネ設備導入や、街路灯のLED改修等を進め、区役所におけるCO₂排出量削減目標は達成できていますが、庁有車の低公害車導入率は停滞しています。



資料：オール東京 62 市区町村共同事業 みどり東京・温暖化防止プロジェクトのデータをもとに作成
出典：江東区環境基本計画（江東区）

図 2-23 江東区域におけるCO₂排出量の推移

地球温暖化の課題

ゼロカーボンシティ江東区の実現に向けて、家庭、事業者の再エネ導入の更なる促進と、省エネ行動の取組の拡充・徹底をさらに進めていく必要があります。

また、再エネ電力の調達や庁有車の低公害車導入率向上など、区役所におけるCO₂排出量削減に向けて、全庁で計画的に取り組むことが必要です。

【視点②】循環型社会の取組状況

循環型社会の現状

区民・事業者に対して 5R の普及啓発に取組、家庭でのコンポスト等による生ごみ減量化や古着・古布等の回収による資源化を行っています。

区民 1 人当たり 1 日の資源・ごみ量は新型コロナウイルス感染症に伴う外出自粛等の影響により一時的に増加しましたが、その後は着実に減少しています。



出典：江東区環境基本計画（江東区）

図 2-24 江東区域における区民 1 人当たり 1 日の資源・ごみ量の推移

循環型社会の課題

気候変動対策との相乗効果が期待されるサーキュラーエコノミー（循環経済）の実現に向け、5R の取組を定着させるべく、更なる啓発や情報発信を行い、ライフスタイルや事業活動における行動変容の促進が必要です。

また、プラスチックをはじめとする製品の回収やリサイクルに関して、区民や事業者との情報の共有や連携強化を図り、資源循環型社会の形成に向けた取組を検討する必要があります。

【視点③】防災まちづくりの取組状況

防災まちづくりの現状

江東区では低平地に位置することから、かつては浸水被害が頻発していました。その後、江東三角地帯の整備事業により内部河川の護岸工事や水門を整備してきた結果、近年の浸水被害は大幅に減少しています。

また、歩道の透水性舗装の整備や区立施設における雨水利用設備の導入が進められ

ており、雨水流出抑制対策が推進されています。

表 2-18 江東区における浸水被害の履歴

災害発生日	災害の種類	被害件数※1	総雨量※2	時間最大雨量※2	写真
昭和22年 9月14日	カスリン台風	1,771戸	166mm	34mm	
昭和23年 9月16日	アイオン台風	0戸	159mm	38mm	
昭和24年 8月31日	キティ台風	30,683戸	164mm	34mm	A
昭和33年 7月23日	台風第11号	10,853戸	137mm	17mm	B1~7
昭和33年 9月26日	狩野川台風	44,523戸	432mm	68mm	C1~4
昭和56年10月22日	台風第24号	1,425戸	218mm	44mm	
平成5年 8月26日	台風第11号	104戸	294mm	65mm	
平成11年 8月29日	集中豪雨	15戸	76mm	50mm	
平成12年 7月4日	集中豪雨	149戸	112mm	78mm	
平成16年10月 8日～9日	台風第22号	107戸	257mm	61mm	
平成16年10月19日～20日	台風第23号	9戸	202mm	39mm	
平成19年 8月24日～25日	集中豪雨	50戸	121mm	99mm	
平成22年 9月8日	集中豪雨	6戸	85mm	41mm	
平成23年 8月19日	集中豪雨	2戸	102mm	73mm	
平成25年10月15日～16日	台風第26号	21戸	230mm	44mm	
平成26年 9月10日	集中豪雨	22戸	114mm	88mm	
平成28年 8月2日	集中豪雨	0戸	92mm	77mm	
令和元年10月12日～13日	台風第19号	0戸	129mm	17mm	

※1 被害件数は次のとおりです。平成5年以前、平成16年以降は江東区資料。平成11年、12年は東京都資料。

※2 総雨量、時間最大雨量の観測地点は次のとおりです。昭和22年～平成12年は東京観測所。平成16年～25年は江東区役所。平成26年は亀戸観測所。平成28年は荒川下流河川事務所小名木川出張所。



図 2-25 狩野川台風による浸水被害
(亀戸6丁目付近、1958年)

防災まちづくりの課題

近年の豪雨災害へのリスク対策に向けて、自立分散型エネルギー設備等、災害時のライフライン確保のための取組を推進することが必要です。

また、災害時に区民が、安全かつ迅速な避難行動ができるよう、情報の周知、意識啓発等の強化が必要です。

【視点④】環境汚染対策の取組状況

環境汚染の現状

気象条件等の要因により光化学オキシダントや河川・海域の水質等の一部の項目について環境基準非達成の状況が見られることはありますが、環境汚染対策の目標は概ね達成できています。

環境汚染の課題

気温上昇による生成反応の促進等により、様々な汚染物質の濃度が変化していることが報告されています。今後、地球温暖化により光化学オキシダント等の濃度上昇のリスクが高まることが懸念されることから、大気汚染物質等の排出防止対策は引き続き重要です。

(2)間接的な要因による生物多様性への影響

私たちが生活の中で使っている資源は、江東区やその周辺だけでなく、それを作っている場所の自然にも影響を与えることがあります。たとえば、木材は山の中や外国の森から取られていますが、必要以上に木を切りすぎると、そこに住んでいる生きもののすみかがなくなったり、土砂くずれなどの災害が起きやすくなる等の問題が出てきます。

このような問題は、木を切るという直接的な行動によって起こりますが、その背景には、私たちが物を作ったり使ったりする「生産と消費」の行動が関係しています。

つまり、生きものの種類が減ったり、自然の働きが弱くなったりする原因には、目に見えるものと見えにくいものがあり、それらが複雑に関係しているのです。

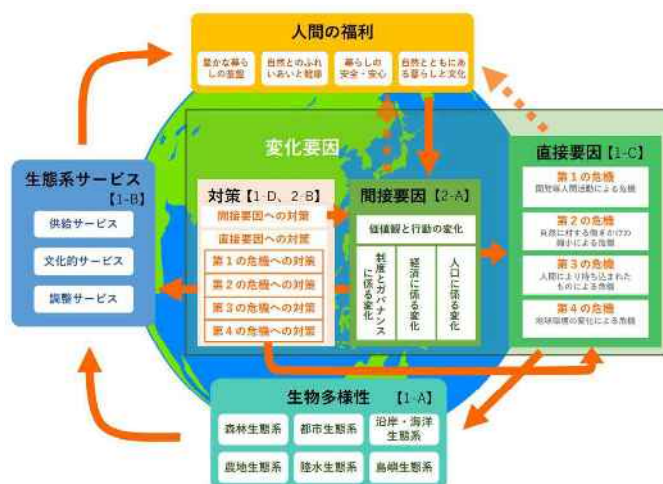


図 2-26 生物多様性及び生態系サービスとその変化要因

※ 生物多様性及び生態系サービスの総合評価 2021(Japan Biodiversity Outlook 3, JB03)政策決定者向け要約報告書（令和3年3月19日 環境省）

そのため、直接的な要因への対策だけではなく、私たちの暮らしのあり方から根本的に変えていくことも必要です。IPBES では、そのためのポイントとして、8点ほど挙げています。



図 2-27 地球の持続可能性の実現に向けた社会変革

※ IPBES 生物多様性と生態系サービスに関する地球規模評価報告書 政策決定者向け要約（令和2年3月 環境省）

【視点①】テレカップリングの問題

テレカップリングの現状

都市に住む人たちの買い物や消費の活動は、遠く離れた地域の自然や生きものに影響を与えることがあります。これを「テレカップリング（社会経済と環境の関わり合い）」と呼びます。

そのため、私たち一人ひとりの行動や取組が、自然を守るうえでとても大切になります。世界では、生物多様性への影響が大きい商品や食品の消費を避けるような動きさえあります。

江東区では、企業の中でも早い時期から自然に関心を持ち、仕事の中で生きものを守る活動をしている会社もあります。



図 2-28 コーヒーの消費を例にしたテレカップリングのイメージ

テレカップリングの課題

生きものを守る活動をしている会社は、今のところ一部の大きな会社に限られていて、特に中小企業ではまだあまり広まっていないという課題があります。

また、私たち一人ひとりが、自分の行動が近くの自然だけでなく、遠くの国や地域の自然にも影響を与えているかもしれないことを意識して、行動や考え方を変えていくことが大切です。

(3)自然共生の課題(生態系ディスサービス)

生態系から得られる恩恵は「生態系サービス」と呼ばれる一方で、人にとって困った影響をもたらすこともあり、これを「生態系ディスサービス」と呼びます。たとえば、虫が大量に発生したり、動物が畑を荒らしたりすることなどです。

江東区では、都市の中に人の暮らしと自然が近くにあるため、こうした生態系ディスサービスがいろいろな場面で起こっています。

【視点①】トラブルとなる生きものの状況

トラブルとなる生きものの現状

ウミネコのような鳥の中には、ビルの屋上などに卵を産んで子育てをするものもいます。こうした場所では、糞による汚れや鳴き声による騒音などで、人の生活に困った影響が出る場合があります。そのため、被害を減らすための対策や注意の呼びかけが行われています。また、ヒアリやセアカゴケグモなどの外来生物や人に危害を加える生きもの、ネズミ、蚊（カ）、ハエ、ノミ、シラミ、ダニなど、人に病気をうつす可能性のある生きものによる健康被害なども報告されています。



写真 2-14 ウミネコの親子(左)と屋上の糞害(右)

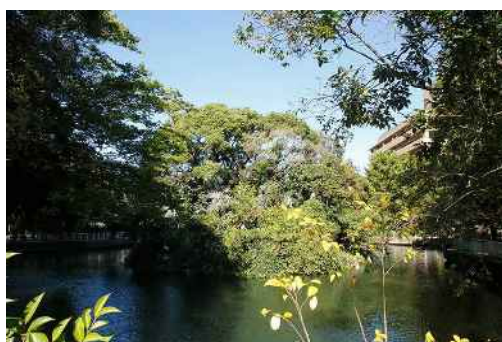


写真 2-15 仙台堀川公園 野鳥の島



写真 2-16 仙台堀川公園 親子の森

トラブルとなる生きものの課題

仙台堀川公園と横十間川親水公園が合流する場所にある「野鳥の島」や、仙台堀川公園内の「親子の森」では、木がたくさんある自然の中で、鳥の鳴き声がうるさい、糞で汚れる、においが気になるといった苦情が、2023年以降、毎年10～20件ほど寄せられています。こうした問題に対して、東京都や江東区では表にあるような対策を行っていますが、2025年度の時点でも苦情の数は減っていません。

そのため、これからも人と生きものがうまく共に暮らしていけるような仕組みを考えていくことが大切です。



写真 2-17 野鳥の島 サギ類による被害状況
(コロニーに多くの個体(○印)が集まることによる騒音、悪臭など)

表 2-19 江東区における主に行政によるトラブルとなる生きものの対策例

項目	団体名	対策内容	
トラブルとなる 生きものの対策	江東区・ 東京都	ウミネコの対策(区・都)	マンション屋上における産卵・繁殖に伴う糞害や騒音被害の軽減に向けた事前対策周知、相談窓口の設置
		ネズミの防除(区)	ネズミの糞害や感染症媒介等の被害軽減に向けた事前対策や捕獲方法の周知、相談窓口の設置
		スズメバチ等の防除(区)	ハチ被害軽減に向けた生態情報の発信や事前対策の周知、相談窓口の設置
		カや衛生害虫の防除(区)	感染症媒介等の被害軽減に向けた生態情報の発信や事前対策の周知、昆虫成長抑制剤投入事業、ウイルス保有状況調査



図 2-29 ウミネコの被害防止リーフレット

コラム 外来種の考え方

(特定外来生物・生態系被害防止外来種リスト)

コラム 外来生物対策の考え方 (3 原則)

第3章

戦略における将来像・目標

- 1 目指すべき方向性
- 2 各主体の位置付け
- 3 2050 年将来像と 2030 年目標
- 4 地区別将来像

第3章の概要

本章では、第2章で整理された現状と課題を踏まえ、江東区の生物多様性地域戦略の将来像と目標を示しています。都市化による生息地の減少、外来種の影響、担い手不足などの課題に対し、エコロジカルネットワークの保全や環境教育の推進など、主要な方向性と地域ごとの具体的な取組を整理しています。

2050 年将来性 (長期)

水と緑、昔と未来、生きものと人がつながる持続的な自然共生社会

—江東区の特徴である水辺と緑地、歴史と未来、生きものと区民がつながり、持続的な自然共生社会を—

目指すべき方向性

- [illegible]

2030 年目標（短期）

基本目標Ⅰ 守り、育てる

生物多様性のつながりや魅力を**守り**、生きものと人が共生しながら、
江東区のかげがえのない水と緑を**育てる**

基本目標Ⅱ 生かし、つなぐ

生物多様性の恵みや自然の働きを大切に生かし、江東区の歴史と文化を未来につなぐ

基本目標Ⅲ 知って、変わる

生物多様性の価値や大切さを**知って**、子どもから大人まで協力しながら、
地球環境に配慮する行動に**変わる**

1) 深川北部地区

2050 年得來登

多様な生きものが生息する都立公園を拠点に、水運都市の面影を残す水と緑のネットワークを生かし、歴史ある景観を彩るまち

表 3-2 深川北地区における 2050 年将来像

見学施設	場所・施設	特色	目標
みどり・ 生きもの の拠点	小名木川 (瀬田川には津田 南部地区に詳述)	「寛川」と狭田川等による豊かな生き物や水鳥の重要なネットワークとして機能し、良好な水辺環境が形成されています。 ・豊かな水辺で釣りや観察など体験の場となっています。	I
みどり・ 生きもの の拠点	郡立緑工意瀬 公園	・生き物多様性・保全生態の調査や保全と体の連携により、良好な緑地・池が保たれたエコーゾーンを形成しています。 ・花・紅葉の名所や日本画館におおきくなど、多種多様な主体の自然観察や体験が実現しています。 ・まとまった自然を生かした環境教育・研究活動が行われています。	II
みどり・ 生きもの の拠点	郡立木場公園	・大瀬川・仙台堀川につながる良好な緑地が保たれています。 ・花・紅葉の名所など自然観察や体験の場となっています。 ・都市緑化推進計画や緑地の環境教育や区民まつりでの普及啓発が行われています。	III
みどり・ 生きもの の拠点	郡立清池公園	・昔から受け継がれてきた土産や緑地・池が保たれエコーゾーンを形成しています。 ・花や紅葉、鳥と名所の名所として自然観察や歴史・文化の体験の場となっています。 ・歴史の遺産を生かした環境教育が行われています。	IV
みどり・ 生きもの のみち	大瀬川・仙台堀 川	・区中心部を縦断する良好な水辺環境や水鳥の重要なネットワークとして機能し、良好な水辺環境が形成されています。 ・仙台堀川公園は良好なエコーゾーンが形成されています。 ・豊かな水辺で釣りや自然観察、川沿いの桜並木での花見など体験の場となっています。	V
新たな評価			
みどり・ 生きもの の拠点	南勢エリア(横 土川・川越公園 等)等	・連続する緑地・水辺が保たれエコーゾーンを形成し、住環境の中心となる生きものの中核に共有しています。 ・日頃の自然観察や憩いの場となっています。	VI
みどり・ 生きもの のみち	郡立清池公園 ・小名木川	・江戸公園やまとった緑地のあき作田園・マンション・寺院といった緑地がネットワークとして機能しています。 ・日頃の自然観察や憩いの場となっています。	VII
みどり・ 生きもの のスポット	ボケツエリ パーク(三島 公園、稲垣川 公園、仙台堀 川、小名木 川)	・区と市民団体や学校・施設・協議し、貴重な遊憩環境が保たれ多種多様な生きものが息づいています。 ・身近な自然を生かした環境教育が行われています。	VIII
みどり・ 生きもの のスポット	コミュニ ティ ガーデン	・生き物多様性に配慮したガーデン活動が広がっています。 ・ガーデンをきっかけに環境教育が行われています。	IX

※各場所・施設の将来像につながる1つの2030年目標を示します。



第3章 戦略における将来像・目標

1 目指すべき方向性

江東区に成立する生態系、生物多様性及び江東区内で進められている保全活動の現状を分析することでいくつかの課題が見えてきました。それらの課題を解決させるために目指すべき方向性を表 3-1 に示します。

表 3-1 江東区における課題と解決に向けて目指すべき方向性

課題	解決に向けて目指すべき方向性
第1の危機（開発など人間活動による影響）	
生息・生育地の保全	江東区における生物多様性の保全及び拡大
エコロジカルネットワークの保全	江東区とその周辺におけるエコロジカルネットワークの維持・強化
生きものの保全	江東区における生物多様性の保全及び拡大
希少な生きものの保全	
歴史・文化的景観の維持	地域の自然資源を生かした体験活動への参画推進と歴史・文化の保全・継承
農地利用の維持	生物多様性に配慮した自然の恵みの持続的利用の推進
第2の危機（自然に対する働きかけの縮小による影響）	
生物多様性の活動に関する担い手の確保	生物多様性の保全に貢献する環境教育・人材育成の促進
生物多様性に関する情報の集約化	多様な主体と連携した自然環境等に関する情報の集積と発信
情報の発信拠点の確保	
様々な主体間の連携・情報交換の場の確保	あらゆる主体の連携・協働による取組の推進
生物多様性に関する普及（理解）の促進	生物多様性の理解促進
生きものとのふれあい体験の参加者の確保	生物多様性の保全に貢献する環境教育・人材育成の促進
第3の危機（人間により持ち込まれたものによる影響）	
外来生物の管理	生態系や人の生活を脅かす外来種対策の推進
河川ゴミや海洋プラスチック問題	日常生活や事業活動を通じた地球環境への配慮と気候変動対策の推進
第4の危機（地球環境の変化による影響）	
再エネ・省エネの徹底	日常生活や事業活動を通じた地球環境への配慮と気候変動対策の推進
行動変容の促進	
区民、事業者との連携強化	あらゆる主体の連携・協働による取組の推進
豪雨災害へのリスク対策	防災・減災や景観形成に寄与する NbS の推進
意識啓発等の強化	生物多様性の理解促進
大気汚染物質等の排出防止対策の継続	日常生活や事業活動を通じた地球環境への配慮と気候変動対策の推進
間接的な要因による影響	
テレカップリング	生物多様性に配慮した自然の恵みの持続的利用の推進
自然共生の課題（生態系デイスサービス）	
鳥類のコロニー等による被害	生きものとの共生社会の実現

2 各主体の位置付け

本戦略は、江東区に關係する各主体が連携・協働することで推進されます。ここでは、江東区、区民等（江東区民をはじめ通勤・通学者、地域に関わる人々）、民間団体（協議会・NPO等）、事業者、教育・研究機関、国・都を主な取組主体として位置付けます。これらの主体は、国（国土交通省、環境省等）や東京都、周辺区等の取組と連携及び情報共有を行うことでより実効性の高い取組を目指します。

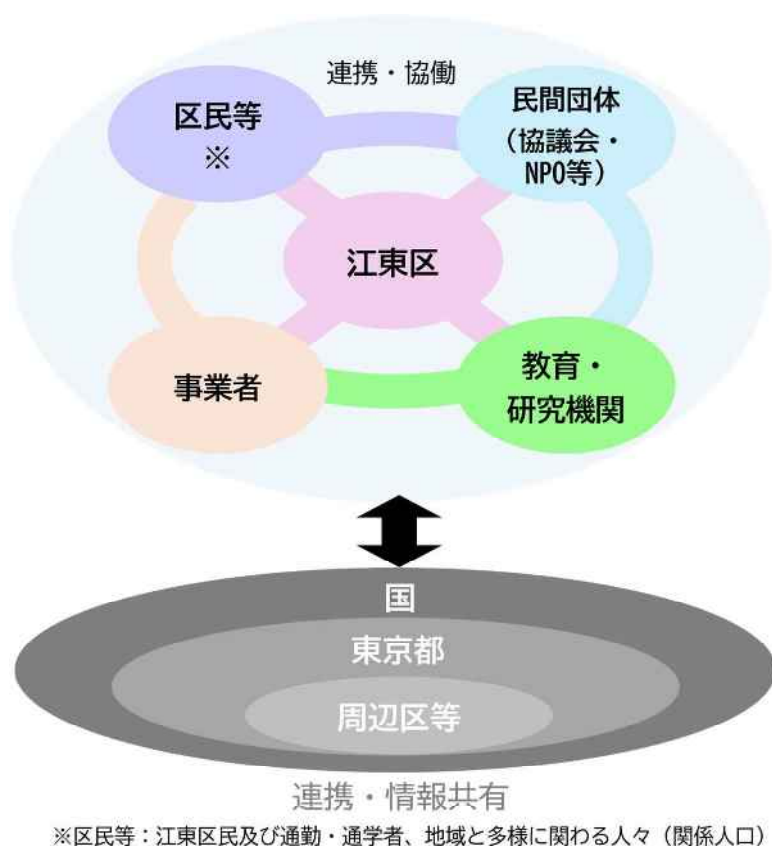


図 3-1 取組主体の關係

3 2050 年将来像と 2030 年目標

本戦略では、2050 年の自然共生社会の実現に向けて、江東区が有している立地、資源、生きもの
また、2050 年の将来像の実現とネイチャーポジティブの実現に向けて、江東区の現状と目指す

2050 年将来像（長期）

水と緑、昔と未来、生きものと人がつな
—江東区の特徴である水辺と緑地、歴史と未来、生き

目指すべき方向性

江東区における生物多様性の保全及び拡大

江東区とその周辺におけるエコロジカルネットワークの
維持・強化

生態系や人の生活を脅かす外来種対策の推進

生きものとの共生社会の実現

多様な主体と連携した自然環境等に関する情報の集積と発信

生物多様性に配慮した自然の恵みの持続的利用の推進

防災・減災や景観形成等に寄与する NbS の推進

地域の自然資源を生かした体験活動への参画推進と歴史・
文化の保全・継承

生物多様性の理解促進

あらゆる主体の連携・協働による取組の推進

生物多様性の保全に貢献する環境教育・人材育成の促進

日常生活や事業活動を通じた地球環境への配慮と気候変動対
策の推進

2030 年目標（短期）

基本目標Ⅰ 守
生物多様性のつな

基本目標Ⅱ 生
生物多様性の恵み

基本目標Ⅲ 知
生物多様性の価値

力、取組を最大限に生かすことのできる将来像を設定します。
べき方向性及びそれを踏まえた 2030 年までに達成する3つの基本目標を次のとおり掲げます。

共生的な持続可能な自然共生社会

生きものと区民がつながり、持続可能な自然共生社会を一

育ち、育てる

生きものや魅力を**守り**、生きものと人が共生しながら、
江東区のかげがえのない水と緑を**育てる**

生かし、つなぐ

生きものや自然の働きを大切に**生かし**、江東区の歴史と文化を未来に**つなぐ**

知って、変わる

生きものや大切さを**知って**、子どもから大人まで協力しながら、
地球環境に配慮する行動に**変わる**

イラスト

図 3-2 自然共生社会の実現に向けた

挿入予定

江東区の 2050 年将来像（イメージ）

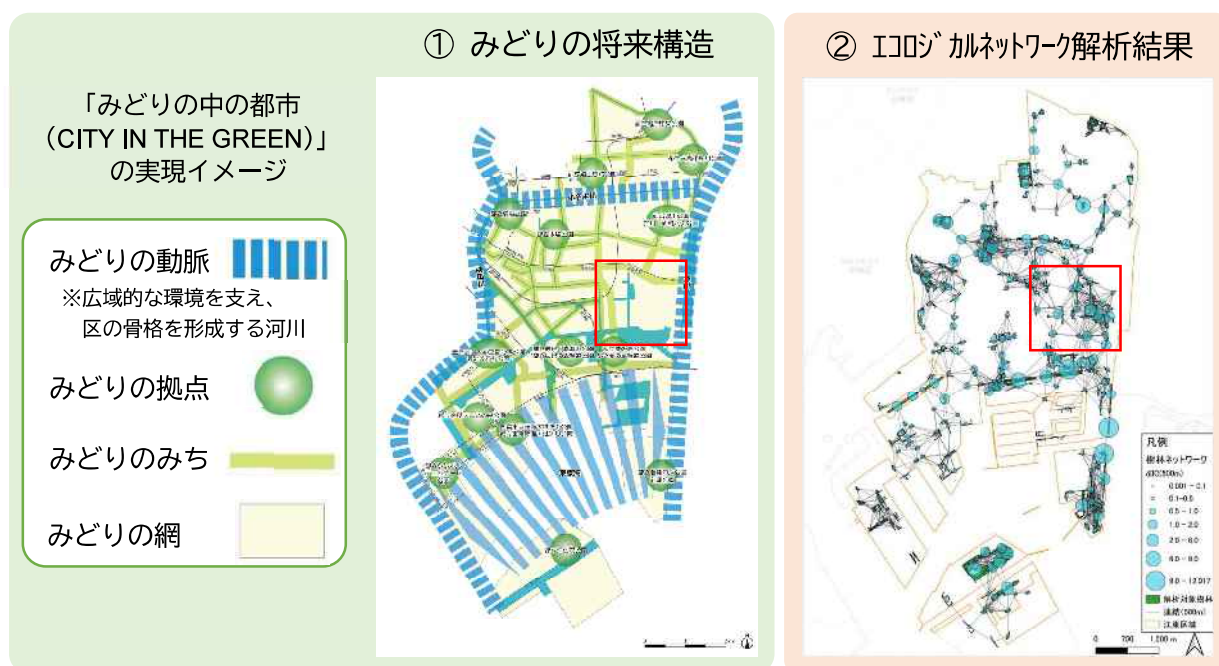
コラム City In the Green

4 地区別将来像

地区別将来像では、2050 年将来像の実現に向けて、今ある江東区の自然環境を維持しつつ、より強固に保全していくことを目指した水と緑のエコロジカルネットワークを示すとともに、生物多様性保全の観点から重要な拠点等の将来像を示します。

ここでは、みどりの基本計画（後期）における「みどりの将来構造」に対して、生きものの視点である「エコロジカルネットワーク」の解析結果を重ね合わせることで、みどりの将来構造では示されていない【生きものにとって重要なネットワークの場所】を抽出しました（8 か所の「生きものの拠点」、10 本の「生きもののみち」）。また、生きものにとって生育・生息箇所となる重要なスポットも抽出しました。

これにより抽出した場所は、江東区の生きもののエコロジカルネットワークをより強固に保全していくために、3 つの基本目標を目指した生物多様性の保全の取組を推進します。



- ①みどりの将来構造と
②エコロジカルネットワーク解析結果
の重ね合わせ

②
①

抽出した重要な拠点・
ネットワークの例
(赤枠：南砂町駅南エリア)

- ①みどりの将来構造では示されていないが、
②の解析結果から、
現状でネットワークがある重要な場所の抽出

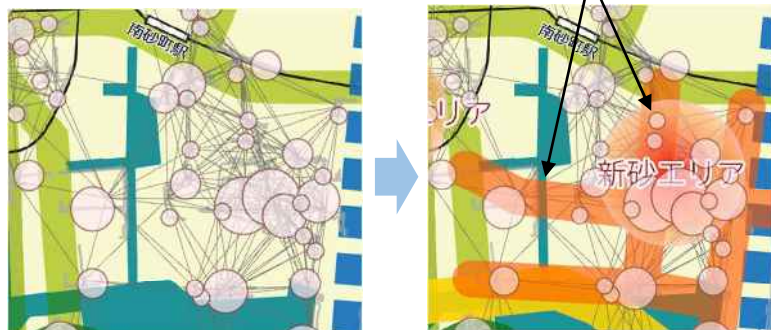




図 3-3 2050 年将来像の実現に向けた江東区の水と緑のエコロジカルネットワーク (生きものの視点からの見直し版)

地区区分は、都市計画マスタープラン 2022（令和 4 年 3 月）に従い、6 つの地区（南部地区は西と東を 1 地区とします）に分けて、地区別の将来像を次頁以降に示します。

地域区分	地区区分		対象区域
1. 深川地域	1. 深川北部地区		白河出張所管内
			小松橋出張所管内
	2. 深川南部地区		旧東陽出張所管内
			富岡出張所管内
2. 城東地域	3. 城東北部地区		亀戸出張所管内
			大島出張所管内
	4. 城東南部地区		砂町出張所管内
			南砂出張所管内のうち湾岸地区以外
3. 南部地域	南部地区	5. 南部地区西	豊洲特別出張所管内（豊洲・有明・東雲・青海） （臨海副都心以外の首都高速道路湾岸線以南は除く）
		6. 南部地区東	豊洲特別出張所管内（塩浜・潮見・枝川・辰巳） （臨海副都心以外の首都高速道路湾岸線以南は除く）
	7. 湾岸地区		首都高速道路湾岸線以南（臨海副都心は除く） 南砂出張所管内のうち、新砂（新砂地区地区計画区域は除く）、夢の島、新木場、若洲、中央防波堤埋立地



図 3-4 都市計画マスタープラン 2022 における地域・地区区分

1)深川北部地区

2050 年将来像

多様な生きものが生息する都立公園を拠点に、水運都市の面影を残す水と緑のネットワークを生かし、歴史ある景観を彩るまち

表 3-2 深川北部地区における 2050 年将来像

将来構造	場所・施設	将来像	目標※
みどり・生きものの動脈	小名木川 (隅田川は深川南部地区に詳述)	・荒川と隅田川等をつなぐ水生生物や水鳥の重要なネットワークとして機能し、良好な水辺環境が形成されています。	I
		・豊かな水辺で釣りや観察など体験の場となっています。	II
みどり・生きものの拠点	都立猿江恩賜公園	・生物多様性保全事業の整備や多様な主体との連携により、良好な緑地・池が保たれエコトーンを形成しています。	I
		・花・紅葉の名所や日本庭園にある池や滝など、多種多様な主体の自然観察や体験の場となっています。	II
		・まとまった自然を生かした環境教育、研究活動が行われています。	III
	都立木場公園	・大横川・仙台堀川につながる良好な緑地が保たれています。	I
		・花・紅葉の名所など自然観察や体験の場となっています。	II
		・都市帰化植物園や緑地での環境教育や区民まつりでの普及啓発が行われています。	III
	都立清澄庭園	・昔から受け継がれてきた土壌や緑地・池が保たれエコトーンを形成しています。	I
		・花や紅葉、鳥と名石の名所として自然観察や歴史・文化の体験の場となっています。	II
		・歴史的な庭園を生かした環境教育が行われています。	III
みどり・生きもののみち	大横川・仙台堀川	・区中心部を縦横につなぐ水生生物や水鳥の重要なネットワークとして機能し、良好な水辺環境が形成されています。	I
		・仙台堀川公園は良好なエコトーンが形成されています。	
		・豊かな水辺で釣りや自然観察、川沿いの桜並木での花見など体験の場となっています。	II
新たに評価			
みどり・生きもの の拠点	南砂エリア(横十間川親水公園等)	・連続する緑地・水辺が保たれエコトーンを形成し、住環境の中に人と生きものが適切に共存しています。	I
		・日常の自然観察や憩いの場となっています。	II
みどり・生きもの のみち	都立清澄庭園～小名木川	・区立公園やまとまった緑地のある住宅団地・マンション・寺院といった緑地がネットワークとして機能しています。	I
		・日常の自然観察や憩いの場となっています。	II
みどり・生きもの のスポット	ポケットエコスペース(三島橋公園、福富川公園、仙台堀川公園、各小学校)	・区と市民団体や学校が連携・協働し、貴重な湿地環境が保たれ多種多様な生きものが息づいています。	I
		・身近な自然を生かした環境教育が行われています。	III
	コミュニティガーデン	・生物多様性に配慮したガーデン活動が広がっています。	II
		・ガーデンを生かした環境教育が行われています。	III

※各場所・施設の将来像につながる 3 つの 2030 年目標を示します。

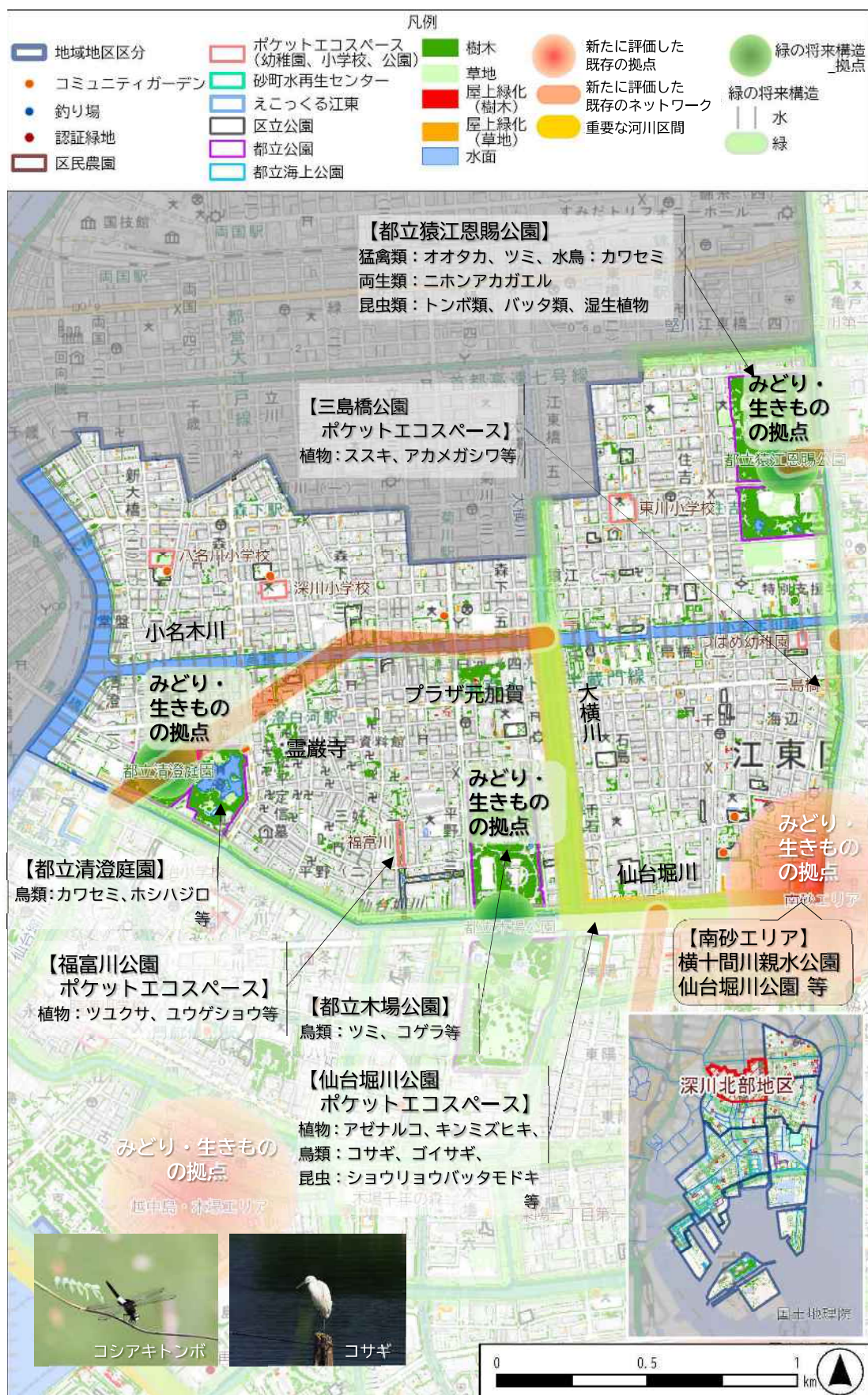


図 3-5 深川北部地区の 2050 年将来像：みどりの将来構造と今いる生きもの

2)深川南部地区

2050 年将来像

地域に根差した主体により育まれた水と緑、隅田川とともに培われた歴史と文化をつなげ、生物多様性の保全をリードするまち

表 3-3 深川南部地区における 2050 年将来像

将来構造	場所・施設	将来像	目標※
みどり・生きものの動脈	隅田川	・上流部と東京湾をつなぐ水生生物や水鳥の重要なネットワークとして機能し良好な水辺が形成されています。	I
		・豊かな水辺で釣りや観察など体験の場となっています。	II
みどり・生きものの拠点	都立木場公園	・大横川・仙台堀川につながる良好な緑地が保たれています。	I
		・花・紅葉の名所など自然観察や体験の場となっています。	II
		・都市帰化植物園や緑地での環境教育や区民まつりでの普及啓発が行われています。	III
みどり・生きもののみち	大横川、横十間川、仙台堀川、平久川 等	・区中心部を縦横につなぐ水生生物や水鳥の重要なネットワークとして機能し、良好な水辺環境が形成されています。	I
		・仙台堀川公園は良好なエコトーンが形成されています。	
		・豊かな水辺で釣りや自然観察、川沿いの桜並木での花見など体験の場となっています。	II
新たに評価			
みどり・生きものの拠点	越中島・木場エリア(企業・大学緑地、越中島公園等)	・東京海洋大学 越中島キャンパスのまとまった緑地や自然共生サイトの企業緑地(再生の社・木場千年の森)を中心に良好な緑地や水辺が保たれています。	I
		・越中島公園は良好なエコトーンが形成されています。	
		・キャンパスや公園は自然観察や憩いの場となっています。	II
		・多様な主体と連携し企業緑地や公園を活用した環境教育や普及啓発、研究活動が行われています。	III
みどり・生きもののみち	仙台堀川～東陽町駅前通り	・区立公園やまとまった緑地のある区役所といった緑地がネットワークとして機能しています。	I
		・日常の自然観察や憩いの場となっています。	II
みどり・生きもののお宝	ポケットエコスペース(横十間川親水公園、東陽一丁目第一公園、各小学校)	・区と市民団体や学校が連携・協働し、貴重な湿地環境が保たれ多種多様な生きものが息づいています。	I
		・横十間川親水公園ポケットエコスペースの植物保存区である「KOFLOS」は希少な植物の生育地となっています。	
		・身近な自然を生かした環境教育が行われています。	III
	コミュニティガーデン	・生物多様性に配慮したガーデン活動が広がっています。	II
		・ガーデンを生かした環境教育が行われています。	III
	田んぼ(横十間川親水公園)	・田んぼの学校に多くの子どもが参加し、昔ながらの農体験を通して、自然に親しんでいます。	II
歴史的な社寺林(深川八幡宮、深川不動堂等)	・昔から受け継がれてきた土壌や緑地が保たれています。	I	
	・花の名所として歴史・文化体験の場となっています。	II	

※各場所・施設の将来像につながる 3 つの 2030 年目標を示します。